

真偽疑問文に対する否定応答表現 — 形式面に着目して —

野口芙美

東京福祉大学 教育学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2019年11月30日受付、2020年2月13日受理)

抄録：否定応答に関する研究は否定応答詞の研究が中心だが、応答詞の実際の使用例と日本語教科書の提示には隔たりがあり、実際の会話では応答詞を用いない表現形式のほうが多いと報告されている。しかし、応答詞を使用しない否定応答表現にはどのような形式があり、実際の会話でどのような形式が多く用いられているのかは明らかにされていない。そこで、本研究では、否定応答詞を用いない否定応答も含めすべての否定応答を「否定応答表現」とし、実際の会話資料を用いて真偽疑問文に対する否定応答表現の使用実態をみた。その結果、日本語教科書でよく提示される否定応答詞、文法的否定形式などの明確に否定の意味を持つ形式より、文脈によって否定の意味となるがそれ自体では否定の意味を持たない形式が多用されていた。さらに、複数の否定形式の使用、肯定応答との併用例も見られるなど、日本人が否定応答でさまざまなストラテジーを用いていることがわかった。

(別刷請求先：野口芙美)

キーワード：否定応答表現、真偽疑問文、応答詞、会話の焦点シフト、自然会話分析

緒言

日本語学習者から「日本人の返答は曖昧ではっきりしない」という声をしばしば聞くことがある。こと否定応答に関しては、「日本人ははっきりNoと言わない」と評されることも少なくない。事実、奥津(1989)や中島(2001)による応答詞の使用実態の調査結果では、否定応答詞の使用は全体の1割にも満たなかった。しかし、否定応答の形式の種類は否定応答詞による応答のみではない。つまり、例えば居酒屋で「お酒飲みますか」と質問された場合、「いいえ、飲みません」と教科書通りに答えることもできるが、「私はジュースにします」と言うこともあれば、「実は下戸なんです」あるいは「今禁酒中で」と返すこともあるだろう。このように、日本人がその真意をはっきりとした言語形式で表さないことはよくある。特に、言いにくいことや相手の発言に対する否定のように相手のフェイスを侵害する恐れのある言語行為にあつては、直接的な表現を避けることも多い。

では、日本語母語話者はどのような否定応答の形式を多用しているのだろうか。吉田(2012)は、真偽疑問文に対する否定応答を応答詞の有無という観点で分析した結果、応答詞を用いない応答が6割近く現れたと報告している。しかし、どのような形式が用いられたかについてま

では言及されておらず、否定応答を概観した研究も見当たらない。

また、これまでの応答研究は、その先行文に焦点が当てられてきた。そのため、応答そのものの表現についてはこれまでほとんど議論されていない。真偽疑問文は応答に肯定か否定を要求されるため、否定を選択する場合には内容や相手との関係性によっても発言に配慮が求められることが多く、応答形式が複雑であることもある。日本語学習者の中には理解に困難を感じる者もいるかもしれない。さらに、真偽疑問文は日常生活でも場面や相手との関係に関わらず高頻度で出現するため、その応答表現に着目するのは日本語教育面からみても意義深いといえる。そこで本稿では、真偽疑問文とそれに対する否定応答に注目し、否定応答詞を用いない否定応答も含めすべての否定応答を「否定応答表現」として実際の会話資料ではどのような形式が多用されているのかを明らかにする。

先行研究

これまでの否定応答研究は否定応答詞に焦点が当てられており、否定応答詞を用いない否定応答について言及しているものは吉田(2012)以外に見当たらない。したがって、ここでは否定応答詞の先行研究について、母語話者を

分析対象とした研究と、教科書や日本語学習者を分析対象に日本語教育と関連付けた研究とに分けてまとめる。さらに、応答に関する研究の中には応答パターンに注目した研究があり、それについても紹介することにする。

1. 日本語母語話者を対象とした否定応答研究

日本語母語話者の会話資料を用いた否定応答研究のうち、自然会話を用いた量的研究には、応答詞を先行文との関連から分類した奥津(1988, 1989)、中島(2001)、山根(2003)のほか、感動詞と「そう」系コメントとの共起を見た土屋(1999)があるが、いずれも応答詞が分析の中心である。一方、吉田(2012)は否定応答詞以外の否定応答が可能であることから、否定応答詞の有無という観点から真偽疑問文に対する否定応答を「「いいえ」のみの応答」「「いいえ」を伴う応答」「「いいえ」のない応答」に分類した。その結果、最も多かったのは「「いいえ」のない応答」で、「「いいえ」のみの応答」はほとんど現れなかった。つまり、否定応答表現において、否定応答詞の使用割合は4割前後であったということになるが、吉田(2012)ではこれら3分類がどのような先行文のあとに現れたかが考察の中心となっており、否定応答詞以外にどのような否定形式が用いられていたのかは言及されていない。

以上のように、否定応答は否定応答詞が分析の中心で、考察対象は先行文に置かれることが多く応答表現自体を分析したものも見当たらない。そのため、本稿では、否定応答詞以外の否定応答も対象に含め、応答表現そのものに注目して形式面からその分類を試みることにする。

2. 日本語教育における否定応答研究

日本語教育分野における否定応答研究は決して多いとは言えないが、日本語教科書と実際の会話の使用を比べ、日本語教科書における否定応答詞の不自然な提示を指摘したものが中心である(サフト・大原, 1999; 小早川, 2006)。

日本語学習者の発話における否定応答詞をみた研究には野口・福嶋(2017)があり、日本語学習者の否定応答詞の使用を調査し、日本語母語話者の使用および日本語教科書における提示との比較を試みている。その結果、日本語学習者が「いや」「いえ」「いいえ」をどれも一定以上使用しているのに対し、日本語母語話者は「いいえ」をほとんど使用せず「いや」の使用が目立つなど、使用する否定応答詞に違いが見られた。また、特に海外日本語学習者の否定応答詞の使用が教科書の提示と似通っていたことから教科書の影響を指摘している。

3. 応答パターン

応答研究には、関連した研究として「断り」、「勧誘」、「ほめ」といった発話行為に焦点を当て、それに対する応答も併せて分析するものがある。中でも「ほめ」は応答表現を重視しているものが多い。金(2012)は、「ほめ」に対する応答を分類する際、一つのほめに対して「肯定」「回避」「否定」などが一つだけ現れるのではなく、二つ以上現れることが少なくないと指摘し、「単独の返答」と「複合の返答」に分けている。

本稿は否定応答を扱うもので基本的に肯定応答は対象としないが、真偽疑問文でも否定の前に一旦肯定するというストラテジーは珍しくない。Brown & Levinson (1987)でも否定行為により相手のフェイスを侵害しないためのストラテジーとして、例1のような「形だけの同意」の例を挙げている。

例1. A: Have you got friends?

友達はいますか。

B: I have friends. So-called friends. I had friend.

Let me put it that way.

います。まあいわば友達のようなものは。いた、と言った方がいいかな。

(Brown & Levinson, 1987, p.154)

日本語でも、「そうですね」などと肯定的な表現で前置きしてから否定をするケースはよく見られる。この、いったん肯定する、というストラテジーは相手への配慮という観点からも大きな意味を持つと考えられ、冒頭だけではなく話題の途中に組み込まれることもある。しかし、これらの応答は、場合によっては肯定なのか否定なのか判断しにくいことも予想される。

以上みてきたように、日本語学習者が日本人の否定応答を理解しにくいと感じるのは、まず学習段階で接する日本語教科書の提示と実際の会話での使用の違い、さらに教科書から応答表現を学んだ日本語学習者と母語話者との使用の違いに原因があると考えられる。しかし、これまで明らかにされたのは日本語母語話者と日本語学習者の「いや」「いえ」「いいえ」の使用頻度や割合のみで、否定応答詞は否定応答表現の一部でしかない。さらに、応答が単独の形式だけではなく複数の形式や肯定表現を含むなどの複雑なパターンを用いられることもありうる。そのため、なぜ日本語学習者が日本人の否定応答の理解に困難を感じるのかを考察するためには、まず日本語母語話者が実際にはどのように否定応答を行っているか、形式面から明らかにする必要がある。否定応答は、奥津(1988)が分類したように、疑問文に対する否定のほか、謝罪やほめなどに対する否定(儀礼的否定)もあるが、本稿では日常生活で最も基本

的なやりとりの一つである真偽疑問文とその否定応答についてみていくことにし、以下の研究課題を設定した。

RQ1. 真偽疑問文に対する否定応答ではどのような形式が多用されるのか。

RQ2. 真偽疑問文に対する否定応答は単独で使用されるのか。単独でない場合はどのような応答パターンが多用されるのか。

研究対象と方法

本稿では、実際の会話資料から真偽疑問文とそれに対する否定応答を抽出し、否定応答表現形式を分類する。また、一つの真偽疑問文に対し複数の否定応答表現形式が使用される場合も考えられるため、どのような形式が併用されたか、その応答パターンについても見ていく。以下、研究対象、否定応答形式の分類、応答パターンについて順に詳しく述べる。

1. 研究対象

ここでは研究対象として、1-1で分析に用いる会話データについて、1-2で分析対象となる真偽疑問文と否定応答について説明する。

1-1. 対象データ

本稿では『BTSJによる日本語話し言葉コーパス2011年版』全294会話(約66時間)のうち、初対面雑談会話の日本語母語場面35会話を扱う。対象データの話者は大学生、大学院生に限定した。話者の男女構成は、男性16人、女性54人で女性のほうが多いが、会話はすべて同性間で行われ

たものである。対象データの1会話あたりの文字化時間は10分～31分28秒で、総会話文字化時間は10時間25分であった。発話文は、基本的にターンの交替とともに改行することになっており、一会話における発話文数は187～927と幅がある。総発話文数は13,861である。

1-2. 真偽疑問文と否定応答の認定

分析対象とするのは真偽疑問文とそれに対する否定応答のペアである。真偽疑問文の認定は大浜(2004)に倣い、「終助詞「か」を伴う真偽疑問文に限らず、広い意味で「聞き手に命題の真偽判定を求める」といえる文(p.39)」とし、具体的には国立国語研究所(1960)の「判断への疑念の表現」「確認要求の表現」「判定要求の表現」^{注1)}を取り上げた。

否定応答については、富樫(2006)が「ある提示された情報Xを否定するためには、話し手の知識の中に比較対象となる情報Yが存在しなければならない(p.36)」とし、情報の比較とは「情報同士の「整合性」の計算である(p.36)」と述べている。そして、「整合性の計算により、不整合という結果が得られれば、提示された情報が否定される(p.36)」としている。本研究はこれを参考に、「先行文の情報と応答の情報が不整合となるもの」を「否定応答」と認定することにする。

2. 否定応答表現の形式分類

否定応答表現の形式については、野口(2019)がそれ自体で否定の意味を持つものと持たないものに大分し、さらに細かい形式に分類している(表1)。

分類の中で最も簡潔で代表的なものは「否定応答詞」であろう。奥津(1988)は否定応答詞には「いや」「いえ」

表1. 否定応答表現形式の分類

否定の意味	分類名	定義	例
あり	a. 否定応答詞	「いや」「いえ」「いいえ」「ううん」とその変化形 ^{注2)} の使用	A: 幸せですか。 B: いいえ。
	b. 文法的否定形式	肯定形式と文法的に対立するもの。主語と述語の結びつきを否定するもので陳述副詞と呼応する。	A: 幸せですか。 B: 幸せじゃありません。
	c. 語彙的否定形式	主語と述語との結びつきを否定するものではない語否定。陳述副詞とは基本的に呼応しない。	A: 幸せですか。 B: 不幸せです。
	d. 否定と呼応する形式	陳述副詞(けっして、ぜんぜん、あまり等)、数量や程度に関わるもの(一つも、なにも等)、～しか	A: 幸せですか。 B: ちっとも。
なし	e. 反義語	先行文の語の反対の意味を持つ語を提示するもの	A: 暑いですか。 B: 寒いです。
	f. 別の意味を持つ語	先行文の語とは別の意味を持つ語を提示するもの	A: 試験は明日ですか。 B: 明後日です。
	g. 会話の焦点シフト	会話の焦点をシフトすることで、結果的に否定を行うもの	A: 試験は明日ですか。 B: 明日は文化祭だよ。

「いいえ」「うん」の四形があるとしているが、これらは表の例で示すように単独で否定応答表現となりうる最も短いものである。

否定応答詞のほか、それ自体が否定の意味を持つ否定応答表現形式には、工藤(2000)が否定形式として挙げている「文法的否定形式」、「語彙的否定形式」、そして「否定と呼応する形式」が考えられる。工藤(2000)によると、文法的否定は、「肯定とは矛盾関係にあって、主語と述語とのむすびつきを否定する文否定(p.95)」であるのに対し、語彙的否定は「単一概念を否定する語否定(p.95)」であり、「主語と述語の結合自体は＜肯定的＞(p.95)」である。つまり、両者は否定のあり方が基本的に異なっている。

「否定と呼応する形式」には「あまり」「決して」などの陳述副詞、「誰一人」「しか」などの数量・程度表現、「一度も」「半年と」のように助詞を伴って否定形式と呼応するものがある。これらは基本的には例2のように、述部を伴って文法的否定形式とともに用いられることが多いと考えられるが、表1のdの例のように述部を省略しても否定応答として機能する。

例2. A: 幸せですか。

B: ちっとも幸せじゃありません。

一方、それ自体では否定の意味を持たないものとして「反義語」、「別の意味を持つ語」がある。前者は「暑い」の反対の意味を持つ「寒い」の提示により、先行文を否定している。後者の例をみると、「明後日」は「明日」の語否定でも反義語でもないが、別の語彙を提示することで先行文との不整合を示している。「寒い」も「明後日」もそれ自体では否定の意味は持たない。この点で、「文法的否定形式」、「語彙的否定形式」、「否定と呼応する形式」とは大きく異なっているといえる。

さらに上記に当てはまらない否定応答が「会話の焦点シフト」(久野, 1983)である。表1のgの例では、試験についてではなく明日についての情報を与えることによって否定的な立場を表明している。ここでは「試験は明日かどうか」、もっと広く捉えれば「試験はいつか」という会話のテーマが、「明日は何があるか」というテーマに変わってい

る。「会話の焦点シフト」は例3のような例も含まれる。

例3. A: 暑いですか。

B: ここクーラー効いてるから。

例3では「暑いかどうか」というテーマが「なぜ暑くないか」という話題に移っている。つまり、応答者は会話の焦点をずらすことによって結果的に先行文との不整合を示しているのである。久野(1983)は、日本語ではこのようなテクニックが「極めてひんぱんに現われる(p.124)」と述べている。この会話の焦点シフトも、言語の形式上では否定の意味を持たない、語用論的な否定と捉えることができるだろう。このような語用論的な否定では、話者間の共通のコンテキストの有無が重要となってくる。

3. 応答パターン

既に述べたように、否定応答の際、複数の表現を用いたり、一度肯定してから否定したりすることは珍しくない。そこで、金(2012)の「複合の返答」の観点を参考に否定応答表現の応答パターンを見ることにする。否定応答表現の応答パターンは、単独の表現でない場合には少なくとも三つのパターンが考えられる(表2)。なお、例は本稿の対象データより抜粋した。

まず、異なる否定応答表現を複数用いる場合で、パターンとしては「否定」から「否定」への無変化である。表2の例では「いや」という応答詞と「ないです」という文法的否定形式が用いられている。日本語教科書でよく提示される「いいえ、～ません」の形に似たパターンである。そして、「否定→肯定」は形式上で一度否定したのち肯定で終わるパターンである。例では、「中国語も喋れるか」という質問に対し、「いや」と否定応答詞で一旦否定しているものの、「副専攻でやってたぐらい」とやや謙遜気味に肯定している。反対に「肯定→否定」はまず肯定した後に否定を行うパターンである。例では、「アメリカに行くのか」という質問に対し、「うん、そうですね」と応答詞と「そう」を用いて相手の発言を肯定したあと、「カナダがけっこう多い」と別の回答を示してアメリカに行くことについて否定的に答えている。

表2. 否定応答表現の複合応答パターン

変化の方向	変化パターン	例 ^{注3)}
無変化	否定→否定	UF01 語学研修とか行かれたことあります？。 UF02 いや、ないです。
肯定方向 への変化	否定→肯定	JBF04 うん、えっ、でも日本語教えるってことは、(うん)中国語も喋れるってこと…？。 JSF02 いや、でもどう、副専攻でやってたぐらいかなあ??。
否定方向 への変化	肯定→否定	UF09 英米科って、留学どこ行くんですか？アメリカとか？。 UF10 うん、そうですね。カナダがけっこう多いかな。

結果と考察

抽出の結果、真偽疑問文と否定応答のペアは全部で202例であった。1では、単独・複合の応答パターンに関わらず、延べ数で出現した応答表現形式の出現数と割合を示し、それぞれの特徴を具体例とともに見ていく。2ではそれらの表現形式と応答パターンを関連させて分析する。

1. 否定応答表現形式

出現した否定応答表現形式のうち、最も多く用いられたのは「会話の焦点シフト（図では「焦点シフト」と略記）」で全体の33.1%（109例）を占めた（図1）。次いで多かったのは「応答詞」21.6%（71例）で、「別の意味を持つ語（「別」）」（18.2%（60例）、「文法否定形式（「文法」）」16.7%（55例）と続いた。「否定と呼応する形式（「呼応」）」「語彙的否定形式（「語彙」）」「反義語」は全体の1割未満であった。

形式に否定の意味を持つか否かという観点からその割合を見ると、「否定の意味を持つ形式」（「応答詞」、「文法」、「語彙」、「呼応」）。表1参照）は158例で48.0%、「否定の意味を持たない形式」（「反義語」、「別」「焦点シフト」）は171例で52.0%とほぼ半々となった。つまり、形式だけで見れば、「応答詞」、「文法的否定形式」、「語彙的否定形式」、「否定と呼応する形式」といった初級初期段階で提出される項目は、否定応答においては5割程度ということになる。しかし、それ以外の割合を占めている「別の意味を持つ語」による否定には、話題によっては語彙力が求められる場合もある。さらに「会話の焦点シフト」に至っては、語用論的なレベルでの文脈の理解が求められ、中級以上でも即座に理解できない可能性もある。

では形式ごとにどのような特徴があるのか、また具体的にはどのような表現が用いられたのか、否定の意味を持つ形式、持たない形式に分けて詳しくみていく。

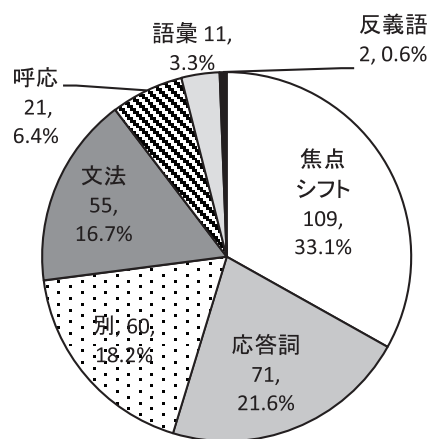


図1. 否定応答表現形式の出現数と割合

1-1. 否定の意味を持つ形式

否定の意味を持つ形式のうち、最も多く用いられていたのは否定応答詞であったが、それでも全体の2割程度で決して多いとは言えない。用いられた否定応答詞は「いや」^{注4)}が58例（81.7%）で圧倒的に多く、「いえ」が8例（11.3%）、「ううん」が5例（7.0%）で「いいえ」は現れなかった。同結果は、これまで報告されていた応答詞の使用実態とほぼ同様の傾向となっている。「いいえ」が全く現れなかったのには、二つの理由が考えられる。一つは、「いいえ」は丁寧体であると位置づけられており（奥津, 1988；中島, 2001）対象データの話者は年齢差がほとんどなかったために用いられなかったこと、もう一つは「いいえ」が「相手の発話をきっぱりと否定する（p.162）」（山根, 2003）ため、初対面では用いられにくかった可能性である。

「語彙的否定形式」で用いられた語彙はそのほとんどが「違う」であった。その他には「意味ない」「考えてない」「難しい」など初級日本語学習者でも理解が可能な基本的な語彙であった。同様に「否定と呼応する形式」では、「あんまり」、「全然」、「そんな（に）」、「別に」、「もう」など、初級段階から教科書で提示される語が使用されていた。

これら否定の意味を持つ形式が現れる否定応答には、共通してフィラーや笑いを伴うものが非常に多く見られた。フィラーで特に多く出現したのが「あ（っ）」である。以下に挙げる例4は応答詞「ううん」と、例5は語彙的否定形式である「違う」の前に「あ（っ）」が用いられている例である。「あ」及び「ああ」は益岡・田窪（1992）では「眼前の事態に対する驚きを表わすもの（p.60）」と記述されており、土屋（1999）では「否定コメントと共に起こることで情報発信へと向かうこともできる（p.253）」とある。例4、5はどちらも「あっ」を伴っており、なくても意味が大きく変わることはないが、用いることで予期していなかった質問に対して一呼吸置いているような印象を受ける。「あっ」というフィラーを前に置くことで、即座に否定するのではないという意志表明とともに、自身の否定応答を予告していると考えられる。

例4 フィラー「あっ」が応答詞の前に使用された例（会話番号196）

ライン番号 ^{注5)}	発話文番号	話者	発話内容
29	28	JBF03	えっ、その前にももう勉強されてたんですか。
30	29	JOF01	あっ、ううん。

例5 フィラー「あっ」が語彙的否定形式の前に使用された例（会話番号172）

23	19	JBF04	この大学です<か?><。>
24	20	NS02	<あっ><。>、違うん<です><。>。

フィラーと同じく笑いも、その直接的な否定表現を緩和するのに有効であると言える。例6は「持っていない」と文法的否定形式で明確な否定を表わしてはいるが、笑いとともに冗談めかすことで場の楽しい雰囲気を作り出している。

例6 笑いを伴った否定応答表現例(会話番号24)

305	288	UF09	あー、じゃあもう持ってらっしゃいますか？。
306	289	UF10	持っていないですよ、これが<笑いながら>。

そのほか、例7のような共話的な用いられ方も見られた。「共話」は水谷(1993)が名付けた会話形態で、「互いに相手の話を完結し合う」もので協調的な言語行動として捉えられるものである。相手への発話に否定応答をするのではなく、相手の発話を否定形式で完結させることで、会話をより協調的に進めていると考えられる。

例7 共話的な否定応答例(会話番号169)

248	204	JBF03]]<え、コースは>{>},(うーん)日本語教育?=>。
249	205-1	NS01	=ではなかったですね>{<},,,

例4～7のようなフィラー、笑い、共話は、日本語教科書の会話における否定応答には初級はもちろん、中上級日本語教科書の会話文でもほとんど見られないが、実際の会話では相手への配慮という点で重要なストラテジーの一つである。宇佐美(2012)は、日本語教科書の会話文でフィラーがないことによって生じるおそれのあるフェイス侵害に触れ、「やわらげ機能」のあるフィラーの使い方の研究と指導を進める必要があると述べている。こうしたストラテジーは、今後、日本語教科書および教育現場での扱いが課題となるだろう。

1-2. 否定の意味を持たない形式

否定の意味を持たない形式のうち、最も多かった「会話の焦点シフト」は、既に述べた通り、語用論的レベルの否定であり間接的な否定応答と言える。そのため、より自身の直接的な否定表明を避け、場合によっては真偽の判断を相手に委ねる効果を持つのが特徴的であった。

例8は「日本で中国語を使う機会がない」ことが話題になっており、JBF03はそうではない理由を述べることによって否定を表明している。この例では、JOF01は「よね」を使用し、単なる質問というより確認要求をしている。例えば「ないですか」という形式で問われるより「ないですよ」と問われた方が肯定への期待は大きい。直接的な否定は相手への配慮に欠ける可能性が高い。そのため、

「会話の焦点シフト」を行うことによって、直接的な否定を避けていると考えられる。一方、例9では、「日本人の留学生が多いか」という質問に対し、「日本人留学生がどのくらいいたか」について具体的な数を示すことで、その判断を相手に委ねているとも解釈できる。

例8 「会話の焦点シフト」で理由を述べる例(会話番号196)

49	48	JOF01	=でも日本ってほんと中国語って、機会ないですよ、使う機会も、(あー)<聞く機会も>{<}。
50	49-1	JBF03	<私の友達>{>}には、いっぱい大学院だと,,
51	50	JOF01	あつ、そっか。
52	49-2	JBF03	同級生、中国から来てる人多い<んで>{<}。

例9 「会話の焦点シフト」で相手に判断を委ねる例(会話番号23)

591	505	UF07	日本人の、留学生の方もけっこう多いんですか？。
592	506	UF08	うーん、私の他にいたのが、2人、2人ぐらいですね。

次に多かった「別の意味を持つ語」は、例10、11のような単純な情報要求に対するものがほとんどであった。例10は「学部4年生か」についての質問、そして例11は「実家は東京か」についての質問で、どちらも応答者のみが答えられる類のものであるが、応答者が自身の意見の表明ではなく情報提供に止まるものであるのが特徴的である。

例10 「別の意味を持つ語」の例①(会話番号30)

12	12	UF22	あつ、じゃ学部4年？。
13	13	UF21	3年生<です>{<}。

例11 「別の意味を持つ語」の例②(会話番号27)

328	304	UF15	<なんか>{>},すごい不便だし<笑いながら>,あ、実家が東京なんですか？。
329	305	UF16	あ、実家名古屋です。

「反義語」は2例のみでほとんど出現しなかった。用いられた表現は「(CDが)高い」に対する「安い」、「(仲が)悪い」に対する「良い」だった。これは、反義語を持つ語自体が多くないためであろう。

2. 応答パターン

抽出された真偽疑問文と否定応答は全202例のうち、単独の否定応答形式が用いられていたものは86例で、それ以外の一つの応答に複数の形式あるいは肯定応答が用いられていた。単独以外のパターンでは、複数の否定応答形式を用いる場合が最も多く、95例見られた。これは応答パターン(表2)では「否定→否定」のパターンに当たり、一つの応答で三つ以上の形式を用いるケースも少なくなかった。

次に、肯定で受けてから否定で応答する「肯定→否定」パターンは18例あり、そのうちの2例は「否定→肯定→否定」とより複雑なパターンを用いていた。そのうち、例12はJSF02が韓国に船で行き、船内で船員と一緒に飲んだという話題である。JBF01の「日本語はしゃべれるんですか? その人たち」という質問に対し、JSF02は「いや」とまず否定応答詞で否定するも「でもなんか日本と、その韓国の船だから、ちょっとは話せるけど」と一旦肯定したあと、最後は「ほとんど話せなくて」と再度否定で終わっている。また、一旦否定してから肯定する「否定→肯定」パターンは3例あった。つまり、一つの応答に肯定と否定を用いるケースは否定応答全体の1割見られ、上級の日本語学習者であってもその判断は困難であることが予測される。

例12 「否定→肯定→否定」の例(会話番号191)

241	226	JSF02	船の、なんか船員の人(うん)、なんか今夜一緒に飲もうみたいになって。
242	227	JBF01	<船員が?><笑>。
243	228	JSF02	<私たち><笑>が5人で行ったんですけど、女の子5人で行って、(うん)で、なんか船員の人(うん)“おいでおいで”って言われて行って、で、ビールとか海苔とか食べて<笑>。
244	229	JBF01	<へえ><笑>。
245	230	JSF02	<すごい><笑>面白かった<笑>。
246	231	JBF01	日本語はしゃべれるんですか?、その人たち。
247	232	JSF02	いや、でもなんか日本と、その韓国の船だから、ちょっとは話せるけど、ほとんど話せなくて。
248	233	JBF01	じゃあ何語で?。
249	234	JSF02	韓国語‘かんーこくご’?、(あー)と、日本語?。

形式ごとに、それらが単独で用いられたか、それとも他の形式と用いられたかを割合で見ると、図2(図内略称は図1を参照)のようになる。図2を見ると、比較的単独で用いられやすいのは「語彙的否定形式」、「別の意味を持つ語」であるが、どちらも単独でも理解が容易であり、完結性の高い形式であるためであろう。この2形式も他の形式と比べて単独で用いられやすいと言っても、使用割合でみれば4割前後である。反対に、特に単独では用いられにくいものとして、「応答詞」、「否定と呼応する形式」があり、どちらも単独使用は1割に満たない。「応答詞」は、土屋(1999)が、「いいえ系の感動詞+コメント」というように、感動詞が必ず後ろのコメントとペアをなしている(p.249)」と述べているように、本稿の結果からもその完結性の低さが窺える。同様に「否定と呼応する形式」も、形式的に否定の意味を持っていたとしてもそのみでは完結しにくい性質が改めて再確認された。

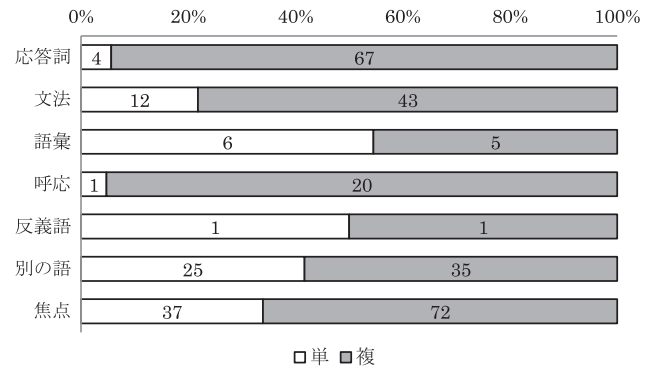


図2. 各否定応答表現形式の応答パターンの割合

2-1. 単独応答パターン

単独で用いられる形式のうち最も多かったのは「会話の焦点シフト」(37例、43.0%)で、「別の意味を持つ語」(25例、28.7%)、「文法的否定形式」(12例、14.0%)、「語彙的否定形式」(6例、7.0%)、「応答詞」(4例、4.7%)と続いた。「否定と呼応する形式」と「反義語」はそれぞれ1例(1.1%)のみであった。

「会話の焦点シフト」は、応答パターンが単独であっても、応答が一発話ではなく複数発話にわたる例もいくつか見られたが、それ以外の否定形式は基本的に短く簡潔である。そのため、それ自体では否定の意味を持たない「別の意味を持つ語」が好まれるのだと考えられる。一方、「文法的否定形式」や「語彙的否定形式」のような、明白な否定はあまり用いられないことがわかった。

2-2. 複合応答パターン

複合的に用いられた形式は延べ数で243あった。複合的に用いられる形式として最も多かったのは「会話の焦点シフト」72例(29.6%)で、全体の約3割を占めた。次に多かったのは「応答詞」の67例(27.6%)で、「文法的否定形式」43例(17.7%)、「別の意味を持つ語」35例(14.4%)、「否定と呼応する形式」20例(8.2%)、「語彙的否定形式」5例(2.1%)、「反義語」1例(0.4%)と続いた。

複合応答パターンで最も多かった組み合わせは「応答詞」+「会話の焦点シフト」(21例)、次に多かったのは「応答詞」+「別の意味を持つ語」(14例)であり、どちらも否定の意味を持つ形式と持たない形式を混用しているパターンである。日本語教科書では、真偽疑問文に対して否定応答を行う場合の練習問題では「応答詞+文法的否定形式」が基本的であるが、実際に会話で用いられたのは3例のみだった。

形式が否定の意味を持っているかどうかという観点でその割合を見てみると、「否定の意味を持つ形式+否定の意味を持たない形式」は72例(75.8%)、「否定の意味を持

「形式＋否定の意味を持つ形式」は16例(16.8%)、「否定の意味を持たない形式＋否定の意味を持たない形式」は7例(7.4%)であった。興味深いのは、全体の延べ数で見れば、否定の意味を持つ形式は半分以下であったにもかかわらず、複合応答パターンでは9割以上が否定の意味を持つ形式を伴っていることである。

実際に多く現れた「否定の意味を持つ形式＋否定の意味を持たない形式」のパターンを見てみると、否定の意味を持つ形式は単なる否定表明に止まらず、その後の話題展開の前触れとなっているようである。例13では、JBF01が1年間北京にいたことを受けてJOF01が「(帰ってきたのは)つい最近か」と質問している。JBF04はそれに対して「いや」で否定したあと、「帰って来てからどのくらい経過したか」に焦点をシフトし、さらに北京語を忘れ始めているという別の話題に切り替えている。

例14は、ある教師についてUF12が「おもしろくないですか」と質問したのに対し、JF11は「おもしろかった」と否定したあと、その教師が「熱心で厳しい」と「おもしろいかおもしろくないか」という話題から「どんな先生か」という話題に移っている。

例13 「応答詞」＋「会話の焦点シフト」の例(会話番号198)

75	70	JOF01	1年間どこに居た…?。
76	71	JBF04	北京なんですね。
77	72	JOF01	あつ、北京、あつ、じゃあ、あれつい最近だよ。
78	73-1	JBF04	いや、でももう帰ってきて1年経っちゃって、
79	74	JOF01	あつ、そっかそっか。
80	73-2	JBF04	その間に全然使わないし、(うんうんうん)もう忘れて…。

例14 「文法的否定形式」＋「会話の焦点シフト」の例(会話番号25)

114	109	UF12	おもしろくないですか?。
115	110	UF11	おもしろかったですけど、でもやっぱ先生、熱心で厳しいですね、なんか。

これまで、否定応答詞、特に「いや」については、先行文への否定だけでなく働きが指摘されてきた。土屋(1999)は否定応答詞の特徴として「他の感動詞は、いずれも先行文の内容を受け止める機能をもっていたのであるが、いいえ系は、その機能の上にさらに応答者からの情報発信の予告という機能を加えてもつ(p.250)」と分析しており、小出(2012)は「いや」が「相手からの質問などへの否定応答をその中心的な機能とするものではない。応答に止まるだけの受身的なものではなく、談話操作という能動的な性格を持つものである(p.155-156)」とまとめている。どちらも否定応答詞を観察した結果による考察ではあるが、

それは否定の意味を持つ否定応答形式にも同様のことが言えるのではないか。否定の意味を持つ否定応答形式は、相手の発話への否定的態度が明白である性格上、それだけで終われば相手のフェイスを侵害しかねない。そのため、否定応答形式を前置き表現のごとく用い、別の話題に転換することで、相手の注意を否定行為そのものからそらしているのではないだろうか。

結論

本稿では、これまでほとんど議論されてこなかった否定応答表現形式が実際の会話でどのように用いられているかを明らかにした。先行文に焦点が当てられることの多かった応答研究の中で、応答表現の形式に注目しその分析枠組みを示したことは今後の応答研究において意義深いと考える。

本稿では否定応答表現形式を、形式上「否定の意味を持つ形式」と「否定の意味を持たない形式」に大別したが、分類した結果、真偽疑問文に対する否定応答では否定の意味を持たない形式の方がわずかに多く半数を超えていた。つまり、実際の日本人の会話においては、はっきりとした否定表現が避けられる傾向にあると言っているだろう。そしてはっきりとした否定表現形式を用いる場合には、フィラーや笑いを伴ったり共話的に相手の発話を否定で完結させたりするストラテジーが見られ、否定応答の際には相手への配慮がなされていることが窺えた。そして、本稿で提案した否定応答表現形式のうち、最も多く用いられていたのは「会話の焦点シフト」で語用論的な否定応答であった。もちろん、他言語でも語用論的な否定応答は行われていると考えるべきであるが、形式や内容が同じであるとは限らないため、誤解やミスコミュニケーションを引き起こす可能性がある。

また、応答パターンを分析した結果、日本語教科書でよく提示される「応答詞＋文法的否定形式」はほとんど用いられず、多様なストラテジーが用いられていることがわかった。さらに、否定応答の1割は肯定応答表現形式も併用しており、それがさらに日本語学習者の判断を困難にさせることが予測できる。

以上のことが、冒頭で述べたような「日本語学習者が日本人の返答を曖昧でわかりにくい」と感じる原因の一端となっていると考えられる。反対に、日本語学習者が端的ではっきりとした否定応答表現を用いれば、本人の意図とは異なった印象を相手の日本語母語話者に与える恐れもあるだろう。今後、それ自体では否定の意味を持たない否定応答表現や、明白な否定表現を緩和するストラテジーを

日本語教科書および教育現場でどのように提示できるのかを考えていく必要がある。

今回は、日本語母語話者の会話において、真偽疑問文に対する否定応答について、どのような形式がどのようなパターンで多用されているのか、日本人母語話者による会話資料を用いて明らかにした。本稿の結果を踏まえ、日本語学習者や教科書の否定応答表現を同じ観点から分析することで、日本語教育における応答表現の扱いについて具体的な提案に繋げることが今後の課題である。

注

- 注1) 「判断への疑念の表現」は判断未定の表現の1つで「ほかに対する質問に一転しうる形式をもちつつ、なお意味上、話し手みずからの内部での疑念にとどまると認められるもの」(国立国語研究所, 1960, p.106)で「かな」「かしら」「じゃないか」等を伴うもの、「確認要求の表現」は「話し手が自己の判断について、相手の確認を求めることの明瞭な表現」(同, p.109)で「ね」「な」「だろう」「でしょう」「じゃない」「じゃないか」を伴うもの、「判定要求の表現」は「相手にyesかnoかの判定を求める表現」(同, p.112)で文末が上昇調となるものと、文末に「か」のをとるもの。
- 注2) 例えば「いや」には「いやー」「いやあ」「や」「やー」、「いえ」には「いえー」など、長音が挿入されたものなども含まれる。
- 注3) 本稿の例で使用された主な記号は以下の通りである。(宇佐美まゆみ「改訂版:基本的な文字化の原則」(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年版より一部抜粋、簡略化。
- 。 1 発話文が終了したことを示す。
 - ?。 質問や確認の発話文が終了したことを示す。
 - 、、 発話の途中で相手の発話が入り、割り込まれた発話文が終わっていないことを示す。
 - <>{<} <>で囲まれた部分が、他者に発話を重ねられた部分であることを示す。
 - <>{>} <>で囲まれた部分が、発話を重ねた部分であることを示す。
 - () 相手の発話中の、短く特別な意味を持たないあいづちを示す。
 - < > 笑いながら発話したものや非言語情報の説明を記す。
- 注4) 「いや」については、「感動のイヤ」(奥津, 1988)と呼ばれる用法や、「非否定用法」があるとする研究(土屋, 1999)もあるが、本稿では扱う対象を先行文が真偽疑問文に限定していることから、現れた

「いや」はすべて質問に対する否定応答とみなすことにする。

- 注5) 基本的に文ごとに改行されるためライン番号は「文」の番号であるが、中には話者の発話が完結する前に別の話者に挿入される場合がある。その場合は、発話が終了していないとみなし、発話番号は「1-1」「1-2」のように複数のラインにまたがることになる。そのため、ライン番号と発話番号は必ずしも一致しない。

文献

- Brown, P. & Levinson, S. (1987): *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge University Press. (邦訳: ブラウン&レヴィンソン, 田中典子(訳) (2011): ポライトネス 一言語使用における、ある普遍現象. 研究社, 東京)
- 金庚芬 (2012): 日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究. ひつじ書房, 東京.
- 小早川麻衣子 (2006): 初級日本語教科書に現れた応答詞ー「いいえ」系応答詞の提示にみる問題点ー. 日本語教育 **130**, 110-119.
- 小出慶一 (2012): 「いや」の否定性と談話での機能. 埼玉大学紀要(教養学部) **47**(2), 145-156.
- 国立国語研究所 (1960): 話しことばの文型 (1) ー対話資料による研究ー. 秀英出版, 東京.
- 工藤真由美 (2000): 2 否定の表現. In: 金水敏・工藤真由美・沼田善子(著), 日本語の文法2 時・否定と取り立て. 岩波書店, 東京, 93-150.
- 久野 暉 (1983): 新日本文法研究. 大修館書店, 東京.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992): 基礎日本語文法 ー改訂版ー. くろしお出版, 東京.
- 水谷信子 (1993): 『共話』から『対話』へ. 日本語学 **12**(4), 明治書院, 4-10.
- 中島悦子 (2001): 自然談話における応答詞の使い分けー「はい」と「うん」、「いいえ」と「ううん」ー. 国土館短期大学紀要 **26**, 75-99.
- 野口芙美・福嶋真由美 (2017): 日本語学習者の「いえ」「いいえ」「いや」ー学習者コーパス分析からみる使用実態ー. 外国語教育研究 **20**, 外国語教育学会, 57-75.
- 野口芙美 (2019): 否定応答表現の分類に関する一考察. 人間文化創成科学論叢 **21**, お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, 95-103.
- 大浜るい子 (2004): 日本語の自然会話における真偽疑問文と応答詞「はい」の関係について. 日本語教育 **123**, 37-45.

- 奥津敬一郎(1988):「はい」と「いいえ」の機能. In: 井上和子(編), 日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究. 研究報告 **4**, 133-182.
- 奥津敬一郎(1989): 応答詞「はい」と「いいえ」の機能. 日本語学 **8(8)**, 明治書院, 4-14.
- スコット サフト・大原由美子(1999): 日本語における否定的返答とコンテキストについて. In: アラム佐々木幸子(編), 言語学と日本語教育－実用的言語理論の構築を目指して. くろしお出版, 東京, 213-227.
- 田窪行則・金 水敏(1997): 応答詞・感動詞の談話的機能. In: 音声文法研究会(編), 文法と音声. くろしお出版, 東京, 257-279.
- 土屋菜穂子(1999): 感動詞の分類－対話コーパスを資料として－. 青山学院大学文学部紀要 **41**, 239-255.
- 富樫純一(2006): 否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」. In: 矢澤真人・橋本修(編), 現代日本語文法 現象と理論のインタラクション. ひつじ書房, 東京, 23-46.
- 宇佐美まゆみ(2012): 母語話者には意識できない日本語コミュニケーション. In: 野田尚史(編), 日本語教育のためのコミュニケーション研究. くろしお出版, 東京, 63-82.
- 山根智恵(2003): 談話における「いいえ」「いえ」「いや」の使い分け. 2003年度日本語教育学会春季大会予稿集, 158-163.
- 吉田更沙(2012): 真偽疑問文に対する否定応答の分類－「いいえ」の有無と話し手の意図を基準として－. 国文目白 **51**, 日本女子大学国語国文学会, 1-13.

Negative Response Expressions for Close-ended Questions: Focused on Forms

Fumi NOGUCHI

School of Education, Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : Studies on negative response expressions usually examine negative response words. However, some studies have pointed to a discrepancy between the actual use of negative responses and their presentation in Japanese textbooks. In addition, it has been reported that in cases where an interlocutor's utterance is directly denied, negative response expressions that do not use negative response words are used more often than those that use them. However, the type of form used in actual conversations is not clear. Therefore, in this study, I have examined the actual use of negative response expressions for close-ended questions using actual conversational data. As a result, the form that did not have the meaning of the negation was often used more than the form that had the meaning of the negation such as negative response words and grammatical negation, which are often presented in Japanese textbooks. In addition, the findings suggest that the Japanese use various strategies in negative responses such as using multiple negative forms and combining negative forms with positive responses.

(Reprint request should be sent to Fumi Noguchi)

Key words : Negative response expressions, Negative response words, Closed-ended questions, Discourse analysis

